

藤沢市立御所見中学校

研究テーマ：「輝き続ける生徒の育成を目指して
～対話を中心にして主体的で深い学びの授業づくり～」

1 実践の目的

本校では毎年実施される全国学力・学習状況調査の正答率が全国・県と比較して低い状況が調査開始以来続いている。基礎学力の向上に長年取り組んできたが、依然として課題となっている。

一方で、素直で協調性があり、何事にも前向きに取り組む生徒が多い。そのような生徒たちの力を伸ばしたいと願い「対話を中心にして主体的で深い学びの授業づくり」をテーマに校内研究に取り組むこととした。

さらに、中学校だけでは課題解決は難しいと考え、学びづくり実践研究推進校の指定を活用し、小・中学校3校が連携することで長年の課題が解決できると考えた。小・中学校3校の子どもたちが思う「育ちたい児童・生徒像」と、保護者、地域関係者、教職員が連携して「育てたい児童・生徒像」を共有し、その共有したイメージの元で、児童・生徒の育成のために、学校と家庭・地域がともに子どもたちの学びと成長を見つめ、支え、喜び合える地域の学びづくりを構築することを目指した。

2 実践の内容

(1) 3校校内研究交流の体制づくり

小・中学校3校で、かながわ学びづくり実践研究推進校の指定を受けたことから、まず3校がどのように校内研究に取り組んでいるのかを共有する体制をつくった。また、学校間の垣根を越えて、日常的に気軽に可能な限り、お互いの授業や、実践を見合い、

ともに研究を深めていく体制づくりを行った。

(2) 学校間連携の授業実践、研究例 「道徳研究授業発表・研究協議」

市内中学校の研究組織による道徳の研究授業を本校で開催し、そこに市内中学校の道徳担当教諭に加え、連携する小学校の教員にも参観してもらった。参観後に、小中学校の管理職および中学校教員による情報交換を行い、今後の「学びづくり」における研究・連携の進め方について協議した。



(3) ペップトーク講演会

12月22日に教員向けに「自己肯定感を育む言葉がけ～ペップトーク～」をテーマ

に、2月6日には第1部として生徒向けに「～もっと“自分を好きになる”言葉の力～PEPTALK」をテーマに、第2部として保護者・地域の方向けに「ペップトーク～思いが伝わるコミュニケーション～」をテーマにペップトーク普及協会から講師を招聘して講演会を行った。



講演を通して、生徒のやる気を引き出し、前向きに挑戦できる言葉がけについて学ぶことができた。2月6日の生徒向け、保護者・地域の方向けの講演会には小学校の保護者や管理職も参加するなど、地域の方も含め地域全体で子どもを育てる雰囲気があり、後述する「身に付ける必要のある力の学習」と併せて、生徒、教職員、保護者・地域の方が同じ学びを共有することができた。

さらに2月6日の講師は本校の元保護者であり、現学校運営協議会委員でもある方が務め、生徒や保護者が普段から顔見知りの方から講義を受けることで、より一層、小・中学校9年間の学び、地域全体で「育ち、育てる」取り組みとなった。

(4) 身に付ける必要のある力の学習

地域の中学校1校と小学校2校での、義務教育9年間で身に付ける必要のある力を、児童・生徒、保護者、地域関係者、教職員が共に学習し、同じイメージをもつ機会として、大学教授に、児童・生徒向けと保護者、地域関係者、教職員向けの講演会を同日に時間を分けて行っていた。地域全体で理解を深めた。



(5) 育ちたい・育てたい児童・生徒像把握

3校の小学4年生から中学2年生に対して「どのような人に育ちたいのか」、保護者、地域関係者、教職員に対して、「児童・生徒がどのような人に育ってほしいのか」を聴くアンケートを実施した。

それぞれのイメージを共有し、そのイメージを目標として児童・生徒の育成のため

の具体的な研究に取り組んでいこうと考えた。

3 実践の成果と課題

(1) 3校校内研究交流の体制づくり

各校研究主任が研究授業や協議会の情報を積極的に発信し、それぞれの教員が他校での取組に参加しやすい体制、雰囲気づくりを行うことができた。

公開授業は、自校の授業や行事と重なることが多く、参加できる教員数が十分ではなかった。より多くの教員が参加できるように、時間の調整等が今後の課題である。

(2) 意識の変革、正解のない問いに挑む

以前から行われていた交流活動を生かしつつ、9年間の学びという大きなテーマを掲げて、校内研究組織の取り組みが加速したと感じている。今までは「やらねばならない」研究であったものが、教職員にとって自分事となり、9年間で何を身に付け伸ばすべきかという、一つの正解のない問いに教職員全員が主体的に取り組みつつある。

4 今後の展開

小・中学校が組織的・計画的に交流・連携する土台ができあがった。今後、より具体的・系統的に研究が進められるようアンケート結果を精査し、狙いを絞って取り組むことが重要であると考えます。

それ以上に、教職員のマインドが大きな鍵を握っており、今年度はかなり管理職が主導した面があったが、次年度以降はボトムアップ形式で様々な教職員から実践のアイデアが出され、交流・連携を楽しみながら3校で協働して研究が盛り上がることを期待している。